The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「締まらないアートの可能性」
Author(s)	西川, 勝; 宮本, 博史
Citation	Communication-Design. 2009, 2, p. 171-188
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8308
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「締まらないアートの可能性」

Possibility of loose art

西川勝 *1　宮本博史 *2

*1　大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター
*2　NPO 大阪アーツアポリア

Masaru Nishikawa*1 and Hiroshi Miyamoto*2

*1　Center for the study of Communication-Design, Osaka University
*2　NPO Osaka arts-aporia

映像
Tape Recording

犬島時間
INUJIMA JIKAN

犬島
Inujima

1

犬島時間、以前

ある日、著者の一人である宮本が「犬島時間[*1]」というアートプロジェクトに参加するという話を持ち出してきた。犬島[*2]という瀬戸内海に浮かぶ小さな離島で開催されるアートイベントで、数年前から続いているという。彼は今年の3月にあったイベント公募に応じて出展することになったのだ。彼はすでに、4月5月と数回にわたって犬島を訪れて構想を練ってきたと言う。夏の到来を前にして浅黒く日焼けした宮本の顔に西川は誘惑され、彼とともに島を訪れることに決めた。

2008年6月28日、雨模様の朝早くに、ぼくたちは大阪を出発し、犬島への定期船が出ている宝伝港にたどり着いたのは昼前だった。定期船は一日に7便で、次の便までは数時間待たねばならなかった。

小雨の降る天気でも、港からは犬島の姿がよく見えた。島の左手に銅精錬所跡の高い煙突が、なだらかな島影に突き刺さるようにまばらに立っている。一筋の煙もなく、先端の欠けている煙突もある。不思議な廃墟の気配が、雨雲とともに島の上に浮かんでいる。煉瓦造りの工場廃墟と不気味に高い煙突群、このユニークな風景を利用してテレビや映画のロケがしばしば行われたらしい。

犬島まで、定期船に乗れば片道300円、わずか8分ほどの距離である。ぼくたちは船着き場のベンチでしばらく考える。大阪から片道240kmの運転で疲れた西川は、この人気のない船着き場でしばらく休むのも悪くない気がしていた。が、時計を見直して次の便まで時間がありすぎることに気づく。結局、4000円のチャーター便で犬島に渡ることにした。恨めしい気分で見つめた航路時刻表の横には、今年の4月に開館した美術館の犬島アートプロジェクト「精錬所」の案内ポスターがあった。銅精錬所跡を生かして設計された施設で、予約制の見学者を募集している。

＊1
犬島で2004年より開催されているアートイベント。岡山市在住の写真家・グラフィックデザイナーである青地大輔が2000年に犬島を訪れ、小さな島に散在する記憶の断片に魅了されたのが端緒となった。それ以来、島民との信頼関係を徐々に作り上げていった結果、2004年には島民の理解と協力のもとに、複数の若手アーティストの参加を得た「犬島時間」のプロジェクトを開始した。2008年まで計5回開催されており、今後も継続の予定である。

＊2
犬島は岡山市の東南部、宝伝港の沖約2.2kmに位置している。岡山市唯一の有人島。面積0.54平方km、周囲3.6km、標高36m、人口61人（平成20年3月31日現在）、平均年齢約75歳で、昭和42年に離島の指定を受けている。地質は主に花崗岩からなり、古くは築城の採石場として栄えた。明治40年代には銅の精錬業などで隆盛を極め、人口も3000人あまりであったが、近年は過疎化・高齢化の波が押し寄せている。
http://blue-works.jp/inujima/
（2008年11月現在）

離島である犬島は離島振興法に基づいて、岡山市が離島進行計画案を作成している。その「犬島地域振興計画」の基本方針として、次のような記述がみられる。

「本地域には、古くから銅の精錬業と採石業などで隆盛をきわめた歴史がある。現在もその当時をしのばせる明治・大正の銅精錬所跡、採石場跡などの産業遺跡が残っており、本地域にしかない独特の雰囲気と景観を醸し出している。また、元気で生き生きとした高齢者の方々が、都会の喧噪とは無縁の人情味ある温かい生活を営んでおり、豊かな自然環境とあいまって、まるで時の流れが止まったかというような静かでのどかな空間を形成している。

これら本地域の特性は芸術文化活動に適したものであり、長寿の島として住民の安心で快適な暮らしを保障することを前提としながら、国際的な文化創造・交流の島として、新たな国際色豊かな文化発信基地づくりを目指していく。

そのため、国内外のアーティストの招聘や市民主体の文化イベントの促進など、芸術文化活動や創造活動を通じた外国人を含む他地域の人との交流の場を持続的に確保するとともに、本土側及び他地域の島々との連携を強化し、新たな交流の輪も広げていくように努め、交流人口の増加を図る。将来的には、それら一時的な交流を通じて当地域の理解者を増やし、短期滞在、中長期滞在を介して定住意欲を創出し、定住につなげていくことにより、島内移住者の増加を促進していく。[*3]」

この計画にも見られるように、犬島はアートによる地域活性化を目指しており、最近ではその方面で話題に上ることが多くなっている。

＊3
岡山県離島振興計画
http://www.city.okayama.okayama.jp/kikaku/kikaku/ritou/index.htm
（2008年11月現在）

ぼくたちだけを乗せたチャーター便の船が、雨の犬島に到着した。人気の少ない島に、両手に荷物をいっぱい持って上陸する。島は買い物や外食には不便なので、船に乗り込む前に色々と買い込んできたのだ。港近くの集落にはいると数人の島民と出会った。宮本は「こんにちは」と声をかけていく。微かに挨拶が返される。何人かは宮本と顔見知りのようであったが、初見の西川がいるせいか、話しかけてはこなかった。荷物も多いし、雨も降っているので早速、今夜の宿となる旧郵便局の建物にはいる。ここは例年、犬島時間の受付と作品展示の場所になる。島の人から鍵を借りて中にはいると、長く人の住んでいない建物特有の埃っぽいにおいがする。明日の午前中には、宮

本以外の出展者とその知人たちが島にやってきて、犬島時間の会場となる空き家の掃除をする予定であった。犬島時間は数軒の空き家や、野外の場所を利用して、複数の作品が出展される。空き家の掃除、地面の草抜き、展示場所の設営などは、出展者自身と友人などのボランティアでなされる。一年ぶりに使うことになる会場は、準備にかなりの作業が必要になる。古びた空き家といえども、犬島の人たちの好意によって貸していただいたものだから、丁寧に使って、よりきれいにして終わるというのが、犬島時間のポリシーだと聞いた。その夜、寝床を確保するために板敷きの部屋にブルーシートを敷こうとしたら、小さな蝉の抜け殻を見つけた。いかにも田舎だなあ、と思ったとき、抜け殻の上に赤いインクの点があるのに気がついた。宮本に尋ねると、「それは前の人の作品でしょう」と言う。地中での数年の記憶が形になった抜け殻は、前の犬島時間が終わってからの時の流れを、その背中に光らせて、ぼくたちの来訪を待っていた。

その夜は、宮本が「犬島自然の家」で知り合いになった、中居米子さんが作ってくれた弁当を食べた。まだ、彼はどんな作品を作るのかを決めてはいない。ここ犬島の人たちと知り合いになっていく過程で、何かが生まれると考えていた。

2

犬島時間、初日

犬島時間開催までの数ヶ月間を、宮本は頻繁に犬島を訪れて数日間滞在しては、島の人々と関係を持つことに費やす。様々な形で偶然の出遭いが濃淡の色を描きながら、宮本と島の人たちをつないでいく。短髪に顎髭、コム・デ・ギャルソンのファッションの宮本は、風変わりなアーティストのお兄ちゃんから、「宮本さん、あんたなぁ」と親しく呼ばれ、島の人と食事をともにする相手に変化していく。多くの紆余曲折を経て犬島時間の開催日には、中居さんから預かった古いベータ方式のビデオテープを編集して計7台のモニターで上映する作品「犬島ヒストリー」に仕上げることにした。作品の展示場所は、ビデオテープを提供してくれた中居さんの自宅前になった。そこは他の作品群の展示場所からは、かなり離れた場所になるのだが、過去の映像の中で生きる人と、その人が現在暮らしている場所とを結びたいという宮本の考えが、多少の不利を排してでも、そこでなければならない理由になった。地面の雑草を抜き、石を除いて平らにして椅子やモニター台を配置する。テントを張る縄は、あれこれの工夫をして固定しなければならない。うちわと扇風機、スキンガードに蚊取り線香も用意して、空き家で展示する以上の手間暇を準備に注いだ。

第5回犬島時間は2008年8月2日から10日のうち6日間、開催された。西川は、その初日に犬島へ渡った。強烈な日差しを受けて、宝伝港と犬島を隔てる静かな海面がまぶしく光っている。昼に出港する定期船は乗客で満杯になった。乗客男性にはカメラを持っている人が多い。若い女性も大勢いる。ほとんどの人が観光客だろう。何組かの家族連れもいる。犬島時間を目当てにしてきた人たち、精錬所跡の見学者たち、そしてキャンプや海水浴に来た人たちだ。みんな楽しげに船から、犬島に飛び出した。船着き場のすぐそばでサックスの演奏が

始まっている。犬島時間に参加しているミュージシャンだ。天気はいいし青空も高い。人も大勢いる。どの顔も期待の色を弾ませていて、今にも踊りそうだ。前回、雨の犬島を訪れたときの印象とはまるで違う。港から集落へつながる細い道で犬島時間のチケットを購入する。島の地図に出展作品の位置が記されていた。

島の墓地がある坂を上り、それから下っていくと、宮本のテントが見えた。黒色の夏帽子をかぶり、タオルを首に掛けた宮本がテントの中のベンチで座っている。まだ、観客は誰もいない。入り口近くに置かれたモニターは、犬島にあった幼稚園・小学校・中学校が平成3年に廃校になったときのテレビニュースが流れている。テント内の6台のモニターには、中居さんが提供してくれたビデオをそれぞれ10分程度の長さに6分割して、それらをループ再生している［図1］。映像内容に関

［図1］「犬島ヒストリー」展示風景
右手に見える家が、ビデオ提供者の中居さん宅。作品名は、中居米子さんによる命名。
（写真：青地大輔）

［図2］ 20年前の犬島敬老会
どじょうすくいを踊る、中居さんの息子さん。

する説明文などはない。また、それぞれのモニターは、上映している映像が撮影された場所を参考にして配置されている。学校が舞台になっている映像は学校があった方向に近い場所に、海水浴場で犬が遊んでいる映像ならば、海水浴場に近い位置に置かれており、中居さんの家の中での映像はモニター群の中心にあり、中居さんの家に向いている。このような工夫がなされているのにもかかわらず、そのことにふれる説明の展示は全くない。

しばらくして、一人の中年男性がテントを訪れた。宮本はうちわを差し出して、椅子を勧める。「これは、犬島の風景ですか」と質問する男性に、宮本は「ここの後ろにある家の中居さんが撮ったビデオなんですよ」と答え、敬老会の演芸の映像を指さして「ほら、このどじょうすくいしている子供が、ここの息子さんでね。もう26歳なんですよ[図2]」と話を加える。「えっー、そうなんですか。古いものが残っていたんですね」と話が続いていく。島の葬式では、棺をのせた船が三度回ってから出港する光景や、廃校になった小学校の運動会で親子が肩たたきをしている姿、子供がお気に入りのアイドルのポスターをアップで撮ったもの、時にはカメラのスイッチを切り忘れて、地面だけを揺れながら撮っている失敗の映像までが流れている。この作品は、観る者に観るべきものを指示しない。宮本は作品を展示するだけでなく、その場に居続けて、作品を観に来た人と会話をする。ちょっとした内容の話が多く、次々と宮本から説明が繰り出されるというわけではない。黙って一緒に観ているだけという時間の方が多いかもしれない。中居さんが提供したビデオは6つに分割されてはいるが、ほとんど編集は加えられていない。テープの劣化のために画像信号がない部分は「信号がありません」の表示がモニターに映し出される。しばらくすると、飽きてしまうのか、どこをどう見ればよいのか、作家の意図をはかりかねてテントを出てしまう観客もいた。か、と思えば、気楽な休憩所といった感じでのんびり過ごす人もいる。後で聞いた宮本の話では、島の人がのぞきに来ると、映像の中に知り合いの姿を見つけては話を弾ませてとどまることがなかったらしい[図3][図4]。要するに、観る人によって全く宮本作品への接し方が異なるのだ。そして、それを当然のようにしている宮本がいる。作品における作家としての宮本の主張が、ほとんど見えにくいままにされている。宮本は主張するどころか、観客の各人各様の見方を、会話を通じて知ることに面白さを見いだしているかのようであった。しかし、宮本がテントの側を離れずに

映像について話をするのは、犬島の映像と犬島でのこの会話が一体となって、作品が成立すると考えていたからだ。犬島時間に姿を現した宮本の作品をある意味で「締まらないアート」だな、と西川は感じた。

［図3］ **見つめる人、話す人、笑う人**
右手の帽子をかぶっている女性が中居米子さん。手前で笑っている男性が宮本博史。テント内にはさまざまな思いが流れている。
（写真：青地大輔）

［図4］ **島民との語らい**
「犬島ヒストリー」を観に来た男性に、犬島の話をしている島の女性。

3

犬島時間、以後

「犬島ヒストリー」という宮本作品で流される映像の7本のうち、6本はビデオ提供者の家族が撮影したものであり、犬島のある家族の歴史に他ならない。内容的に犬島の暮らしと密着したものであるから、島民と島民以外をつなぐ役割も大きくなったのだろうか。しかし、犬島を代表すると言えば、銅精錬所跡のような歴史的遺物の方に迫力がある。宮本の作品には説明がなければ、犬島が舞台とはわからない映像も多かった。それに加えて、中居さんは宮本に向かって「わたしと会わんかったら、どうするつもりじゃったん？　これは、わたしの作品じゃからねえ！」と、万事に頼りなげな彼をからかい気味に言うことがあったことからもわかるように、作家の意図が希薄な印象を残す作品であったことも確かだ。作品自体にいわゆるアート的な自己主張がないことが幸いして、鑑賞者の間に自由な会話を生み出すきっかけになったのだろうか。それとも、宮本が常に会話をファシリテートする役割を果たしたことが大きく影響しているのだろうか。

第5回犬島時間は8月10日に終了する。参加アーティストたちは島を出ていった。宮本は、「なんか違う気がして犬島に残った」と言う。ビデオ提供者の中居さんの家族と、突然に別れるのが名残惜しいのか。まだ、やり残したことがあるのか。自分でもわからないうちに宮本は犬島に残っていた。すると、中居さんの息子がお盆で帰省してきた。映像の中でだけ知っていた小学生が26歳の息子になって宮本の前に現れた。

宮本はこの日のことをブログ[＊4]で、次のように記している。彼のブログは断片的な文章からなり、その文頭には通し番号が付されている。

＊4
犬島時間で宮本博史と島民の方はどうなるのか？
http://inumiya.exblog.jp/
（2008年11月現在）

> 8 / 15（金）：わからないことが起きた
>
> 283，灯ろう流しに参加した。「不思議な縁じゃのぉ」ホントにそう思う。

284，誰かの灯ろうが戻ってきていた。「撮っちゃいけん」

285，浜辺で寝転がって話していた。

こうして宮本は、犬島のお盆で見知らぬ死者の霊を送り［図5］、8月16日に犬島を出る。

［図5］ 灯ろう流し
灯ろう流しをする、中居さんの息子さん。

4

かつて、これからも しばらくは

＊4
Port Gallery T
http://portgalleryt.com/
（2008年11月現在）

宮本が犬島から帰って、大阪市内のPort Gallery T[＊4]で開いた個展『かつて、これからも しばらくは』は、体験型のライブ展覧会であった。2008年8月29日から9月6日までの開催期間中、宮本は所要時間約60分間のライブ展覧会を、計17回実施する。

西川は、その初回に参加した。ギャラリー内の展示空間は宮本自身がデザインしたものである。白を基調とした規定のギャラリー空間に壁紙を貼るなどして居室の雰囲気に近づける。テーブルや椅子、座布団、魔法瓶、湯飲み、菓子入れも、宮本の家族が長く使用してきた愛用の品々である［図6］。宮本は個展に訪れる客を、このテーブルへと招き入れる。

『かつて、これからも しばらくは』のコンセプトを、宮本は次のように記している。「わたしに　関係している、関係していない。これは　どのように　選び取られているのだろう。　私は　散歩をしながら、気になる物が　捨ててあれば、拾って　持ち帰ります。　気になる音が　聞こえれば、レコーダーで　録音します。　気になる状況に　出

［図6］
「かつて、これからも、しばらくは」展示風景

くわせば、ビデオカメラで　録画します。　目の前の現象を　記録・収集することに、関心があります。」

ここで「わたし」とされるのは一般的な自我を指し、「私」というのは宮本個人のことを意味すると聞いた。単語の間に息継ぎのようにスペースが挿入され、短型詩のようなリズムを生み出している。平易なことばであるが、宮本のアート活動の創作的側面の重心を言い尽くしているのではないか。

ライブ展覧会は、「お茶をどうぞ」と客に勧める宮本の声から始まった。魔法瓶には宮本が冷やした麦茶が入っている。10名ほどの客は互いに遠慮して、しばらくの沈黙が生まれる。誰も、ライブが始まったとは意識していない。沈黙の長さに不自然さが混じりはじめた瞬間、宮本は再び口を開く。破れかけの紙カバーを掛けた古本を開きながら、「おばあちゃんが2年前に死にました。おじいちゃんが、その9年前に死にました。鉄道病院におじいちゃんの見舞いに行った後、親父に殴られました。その頃、ぼくは髪を赤く染めていたからです。母と美容院に行きました。黒く染めますかと聞かれて、いいえ、茶色に染めてください…」いつの間にか、宮本の過去の記憶が語られはじめ、観客は自分がライブの最中に投げ込まれたことを知る［図7］。耳を傾ける自分の居住まいを正すのは、観客自身の判断による。宮本はテーブルから去り、照明を徐々に落とし始める。観客はまだ何も映っていないスクリーンに体を向け直し待っている。やがて、床の両端においてあるスピーカーから、様々な音が流れはじめる。聞き慣れたはずの日常の雑音、何かの物音、自動車の排気音、おしゃべりの断片が途切れた

［図7］　**ライブ展覧会のはじまり**
右手に立っているのが宮本、手にしているのは家にあった古い家庭医学書。

りする。知っているはずなのにわからない。皆は次々にやってくるノイズのひとつひとつに耳を澄ませ、何かを聴き取ろうとする。その緊張が室内に高まった時、突然、スクリーンに映像が現れる。目が覚めたような感覚。ある建物の階上にある窓が映し出される。次は何かと身構えている目は、固定した構図に縛り付けられる。定位置から定焦点で撮られた映像、最初は動きのなさに精神が弛緩する。しかし、動かない枠組みが予想以上に長引くと、構図に縛られた目は身をよじりだす。逃げようとする目は微かな動きを見逃さなくなっている。半分開いた窓からはみ出そうとするカーテン、それだけははっきりと動いている。微風にそよぎ、なびかされて、カーテンのドレープの形が変化する。カーテンとともに視野に入る古い外壁も、さびた物干し台も決して動かない。が、動かないものを同じ構図で見つめ続けるという日常ではほとんど経験しない視覚体験によって、いつも見逃していた小さな動きの豊かさを発見することができる。そして、偶然のようにカーテンがめくれあがり、室内にある蛍光灯が覗き見える[図8]。小さな出来事があったことに観るものは小さく驚く。と、映像が消えて再び音だけが聞こえ続ける。ここで、ようやく見ていた映像と流れていた音たちとが直接の関係にないことがわかる。一貫した意味をなさない音の群れは、映像とは別様の世界を伝えていたのだ。

こうして複数の映像と音の塊が、断続的にライブで流し続けられる。公園にある高い樹の途中に引っかかっているフラフープ、それを脚立に乗った男が棒を使って落とす。まわりにはそれを見ている子供たち。金網に囲まれた空き地の中で、雑草をむしっている老人。所在なげに

［図8］ ゆれるカーテン
ゆれるカーテンがめくれあがった瞬間、見えなかった室内の蛍光灯が不意にあらわれる。

ベンチに座っていた男が急に立ち上がり、近くで遊んでいた子供が受け損じたボールを拾いに行く後ろ姿。どの映像も、日常に出会って不思議のない光景であり、大きな意味もなく忘れ去られるはずの暮らしの瞬間である。

そして、照明が戻り映像と音が終わったことを告げた宮本は、入り口近くに展示してあった収集物を指さして、観客に気に入ったものを持ち帰えるように勧める。宮本が路上で見つけ、持ち帰った奇妙な物たち。片目を無くした小さな犬のぬいぐるみ、駄菓子の空き箱、自転車の錠、握りつぶされた煙草、点眼薬の空き瓶など［図9］。どれも路上で踏みつぶされたり、雨に降られ泥をかぶったりして薄汚れている。これらは、普通にはゴミに違いない。しかし、気にかけられて拾われて、ギャラリーの棚に並べて人の目に触れることで、これらの小さな

［図9］ 路上収集物
陳列展示された路上収集物。

［図10］ 真空パック
自分で真空パックする。丁寧にしっかりと器械を押しつける。

物たちは何かを語り始める。それを聴き取り、見つけようとする身構えが、ライブ展覧会に参加した観客のうちに芽生えていた。宮本が足下から拾い上げ、観客の目の高さに差し出した小さな物たちから、観客は自分と特別な関係を結ぼうとする一つの物を探し出す。観客が選んだ物を、宮本は食品の真空パックの器械を使って封印するように告げる。袋に入れるのも、封印のために器械を両手で押すのも、観客自身がする [図10]。総覧的なカタログではなく、観客が宮本と協同して制作した作品を持ち帰る。

アーティスト単独によって、終わりの区切りをつけない「締まらないアート」がこうして観客の家に持ち帰られる。

5

「締まらないアート」の可能性

宮本は、自身のアート活動について、「自身のさみしいという感情を元に作品を制作し、その行為を通して本当の意味で人と繋がろうとしている。しかしそれは、自分がアートを好きだという前提から成立するものである」と語る。表現するに足る素晴らしい美や崇高を、特異な才能でもって作品化する凛々しいアーティストと「締まらないアート」は対極に位置する。「さみしい」からこそ「本当の意味で人と繋がろうとする」宮本のアートは、作家の心理的状況の独白には終わらず、具体的な状況の中で人と人とが対面して交わすコミュニケーションを志向する。

宮本の「締まらないアート」は、その「締まらない」スタイル故に人を巻き込み、新たな発見を生み出す可能性に満ちている。宮本のアート活動の随所には、様々な工夫が盛り込まれている。「締まらない」のは作意の不在ではなく、巧妙な手加減が柔らかな形をなしたものである。さまざまな偶然を受け入れる隙間を、創作活動に編み込む手法は、人を多様に結び付けるための、結節点となりうる可能性に満ちている。